

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號三第

卷七十二第

行發日一月九年三和昭

## 論叢

租稅組合論……………法學博士 神戸 正雄

海運に於ける運賃の最高限度……………經濟學博士 小島昌太郎

ジムメル社會學概念批判……………文學博士 米田庄太郎

## 時論

日支通商條約廢棄について……………法學博士 末廣 重雄

## 說苑

學と實踐……………經濟學士 福井 孝治

ベルギー國立銀行制度の改正……………經濟學士 松岡 孝兒

## 雜錄

普國に於ける小學校經費負擔の調節……………經濟學士 中川與之助

勞働者家族所得保險について……………經濟學士 近藤 文二

獨逸國の臨時部會計……………經濟學博士 沙見 三郎

## 法令

農業倉庫獎勵規則

說苑

學と實踐 (上)

——特に經濟學に關係して——

福井孝治

緒言

科學は、發生的に見て、少く共その主要な根源を實踐的要求に於いて持つ。吾々は意欲し行爲する人間として、特に生活鬭争に於いて知識を必要とする。吾々は、自然に對して並びに他人に對して働きかける爲めに知識を必要とする。知識によつて吾々は、吾々を取り卷く無限に複雑な感性的世界に於いて吾々の行爲の仕方を含目的に適應せしめて行くことが出来る。科學が、發生的に見れば、斯様な實踐的要求を滿す爲めの日常の知識の純化成形せられたものであると云ふことを疑ふことは出来ないであらう。然し乍らジムメルも云つてゐるやうに「眞なるもの、知識 (das Wissen des Wahren) が、人間外存在に對して並びに人間相互の競争に於いて、生存鬭争

の武器であるが故に、人間の認識は實踐的必要から發展したものである、と云ふことが正しいにしても、それは既に久しい以前から最早斯様な由來に結びつけられてゐず、行爲の目的に對する單なる手段たることからしてそれ自身一つの究極的な目的となるに至つた。<sup>1)</sup>即ち認識は實踐的要求に於いて其の根源を持つ。實踐的要求の爲めに認識が行はれる限り、それは自目的ではなく他の目的に對する手段である。發生的に見れば斯様に認識は實踐に對して手段たる地位に在るものであるけれども、今日に於いては實踐と認識又は知識との關係は必ずしも目的と手段との關係ではなく、眞理の爲めに眞理、知識の爲めに知識が追求され、眞理が獨立の價值として認められ、斯様な獨立の價值の擔ひ手として科學は自目的となり、生活の爲めの學問でなく却つて學問の爲めに生活が捧げられる。之を喩へて云へば、貨幣は本來商品交換の爲めの手段として發生したものであるが、後ちには貨幣それ自身が目的となり、却つて商品が貨幣獲得の爲めの手段となるに至つた、と云ふが如きものである。

然し吾々は認識主體の側に於ける心理的變化のみを以つて科學と實踐との關係を充分に説明することは出来ない。科學的研究者の主觀的態度は如何にあらうとも、論理的に科學は實踐に對して手段價值 (Mittelwert) しか持ち得ないものであるかも知れないし或はそうでないかも知れない。私は以下に於いて科學特に經濟學と實踐との關係に就いて若干の考察を施して見度いと思ふ。

科學は認識によつて成立する、認識と云へば、勿論眞理の把握を目標とする精神作用である。そこで科學と實踐との關係を考察するに當つて、眞理に對する實踐的要素の優位を高調する所のプラグマチズムの所論に一瞥を拂ふことから出發したいと思ふ。

よく知られてゐるやうに、プラグマチズムの立場に従へば、眞理は實踐に従たる所のものであつて、眞偽の標準は實踐的效果に存在する。思想の持つ意義は其の實踐的效果に存在し、此の實踐的效果を理解することは思想の持つ意義を理解することである。實踐的效果を有する所の思想は眞な有意義な思想であり、其の實踐的效果を理解することによつて、それぞれの思想の妥當性を明かにすることが出来る。總べての眞理は主觀的であり相對的であり客觀的絶對的な眞理なるものは存在しない、と云ふのである。

斯様な見解は、吾々が歴史的な文化財としての學問を、孤立せしめて、なく全體性に於いて觀察する時、即ち學問を其の歴史的社會的背景と關係せしめて觀察する時、特によく眞理の本質を把握してゐるやうに見える。吾々は、或る時代に於いて眞と考へられてゐた所のものが他の時代に於いて偽とせられるに至つたことを知つてゐる、そうして其の眞とせられてゐた所のものが、其の時代の支配的地位に在る人々にとつて彼等の地位を保つ上に於いて屢々極めて好都合なものであり、其の故に彼等によつて執拗に眞として主張された、と云ふことを知つてゐる。勞賃基本説、資本土地勞働の三位一體説等々經濟學の領域に於いても吾々は幾多の例證を有する。そうして此れ等の説を、其の歴史的社會的全體性に於いて其の實踐的效果に着眼して發生的に説明する

と云ふことは、有意義な研究であるばかりでなく歴史家にとつては一つの任務であらう。然し此のことは、總べての眞理は實踐的效果を標準とし主觀的相對的なものである、と云ふことの證明になるであらうか。眞理自體と眞理とせられた所のものは必しも同一ではない。眞理とせられた所のものが實踐的效果に従つて時代と共に變つたところで、眞理自體が實用を標準とし主觀的相對的である、と結論することは出来ない。水中に入れれば眞直な竿も曲つて見え、少し加工を施すと並行線も並行線でなく見えるが、吾々の眼に眞直でなくまた並行線でなく見えることによつて、同時に眞直な竿が眞直でなくなり並行線が並行線でなくなつた譯ではない。或はまた、地平天動説が破れて地球地動説が妥當として承認されるに至つて始めて地球が太陽の周圍を自轉し始めたのではない。地球地動説にして眞なる限りは、假令吾々の眼には如何に映じやうとも、地球は其の成立以來太陽の周圍を自轉してゐたのである。眞理と眞理とせられた所のものとの關係もこれと同様である。經驗科學に於いて客觀的實在の存在が不可欠の前提であると同樣に、總べての科學に於いて客觀的眞理の存在は疑ふことの出来ない前提である。

客觀的眞理の存在及び人間がこれを概念的思惟によつて把握し得ると云ふことを前提としなければ科學的研究は無意味である。相對論者と雖も一つのドグマとして相對論を主張するのでなくそれを論理的に基礎づけやうとするならば、彼の論理的判斷の客觀的眞理性を承認しなければならぬ。それではなければ、既にプラトニーによつて指摘された様に、相對論それ自身が相對化し、相對論を眞とし絕對論を偽として排斥することは不可能になる。全く絕對的なものを認めない

所の相對論は、學の名に於いて學の價值を否定し、眞理の名に於いて眞理を否定するものであつて、謂はゞ自分で自分の頭を叩いて喜んでゐるやうなものである。それ故にジェイムスの如きも遂には客觀的眞理の存在を承認せざるを得なくなつてゐる。プラグマチズムは智識の發生論或は近頃の *Sociologie des Wissens* の一つの企てとしては存在の意義を有するであらうが、吾々はこれによつて眞理の本質、眞理の把握としての認識の意味を理解することは出來ない。

プラグマチストの所謂實踐的效果或は實用とは何を意味するか明確でないが、それは多くの場合に、意志的行爲に役立つと云ふやうな一般的な意味に於いてははなく、生物學的生命の促進に役立つやうな行爲に導くと云ふ意味に於いて使用されてゐるやうである。然し何れにしてもこれによつて眞偽が決定されると云ふ議論は、如何に驚く可き結果に導くであらう。例へば『私は存在する』だとか『巴里は存在する』だとか云ふやうな、私が苟くも判断せんとする限り、斯く判断せざるを得なくて成立した所の判断も、其れが私にとつて實踐的效果を有する限りに於いて眞であり、そうでなければ偽となり、私や巴里が存在しなくなるのである。恐らく如何なる人も斯様なことを承認し得ないであらう。勿論、時がたてば私は死ぬであらうし、巴里もソドムやゴモラのやうに亡びて仕舞ふかも知れない。然し乍ら現在の私、現在の巴里に就いての判断としては右の判断は、それが眞である限りに於いては、無時間的に妥當する。それは丁度、吾々が經濟學に於いて求める所の、今日の經濟生活についての認識は、それが眞である限りに於いては、假令今日の經濟組織が亡びて仕舞つても、今日の經濟生活に就いての認識としては無時間的に眞である

のと同じことである。總べての經驗的實在は、時間と共に變動するが、斯様な變動する所の實在に就いての認識は、それが眞である限りに於いては、客觀的に妥當する。「總べては流れる」と云ふヘラクリートの命題は知覺され得る感性的實在界に關する限りに於いては妥當するであらうが、それを非感性的な所謂意味の世界又は價値の世界に迄擴張するならば背理に陥る。勿論、科學的知識は「巴里は存在する」と云ふやうな單なる事實的判斷の集合ではない。それは連繫的知識である。個々の事實は一つの包括的な連繫 (Zusammenhang) の下に置かれ、此の連繫に於いて認識されなければならない。然るに感性的實在界は時間的に無限であり内容的に無限に複雑であり、謂はゞ汲めども盡きぬ泉の如きものである。新しき事實は發見しても發見しても盡きない。従つて科學は一舉にして完成することが不可能であるばかりでなく、何時迄立つても不完全であるであらう。吾々は科學が完成して其の發展が終結して仕舞つたやうな状態を考へることは出来ない。此の意味に於いては相對論は相對的な權利を持つ譯である。然し此のことは客觀的な絶對的な真理の存在及び吾々にとつてそれが、假令一舉にして完全にではなくても、認識し得られるものであると云ふことの否定にはならない。それを否定すれば Theoretischer Nihilismus の沼澤に陥る。

實踐的效果又は實用を個人的でなく社會的に解し、社會の多數の人々にとつて實踐的效果があるかないかと云ふことを以つて真理の標準としてもプラグマチズムは救濟されない。何故なれば此の場合には、科學者は科學上の問題を解決する爲めに研究に没頭する必要はなく、大衆をして

如何に解決するのが彼等にとつて實踐的效果があるかを票決でもせしめればよいことになるであらうが、學說の眞偽を數量的多寡によつて決定すると云ふやうなことは、眞摯な研究者の到底承服し得ないところであらう。

實踐的效果を以つて眞理の標準とすることが出来ないこと云ふことは、眞なるものゝ知識が生活闘争に於いて役立ち得ないと云ふことゝ同一でないのは言ふ迄もない。正しき認識は自然に對してまた他人に對して働きかける上に於いて確かに一つの利益である。勿論知識は所謂實際生活に於いて優勝者たる爲めの決定的要素ではない。卓越した學者が實際生活に於いて優勝者でないばかりでなく却つて劣敗者であつた、と云ふやうな例は幾らでもある。民族と民族との争ひに於いても、優れた智性を持つた民族が智性に於いて劣つた民族によつて亡された例がある。人と人との闘争——それは個人と個人との争、階級と階級との争、或ひは民族と民族との争、何れの場合でもよい——に於いては、智性のみならず意志體力其の他自然的社會的の諸事情が参加する。それにも抱らず知識は生活闘争の一つの武器であるとは云へるであらう。然し、其の故に實踐的效果が眞理の標準である、とは云へない。例へば、三角形の内角の和は二直角に等しと云ふ幾何學的命題自體は、苟くもそれが眞である限りに於いては、實踐的效果如何に關係なく、またそれが人によつて妥當として承認されると否とにさへ關係なく、妥當可き筈である。

眞理にして以上述べた様な in sich findend な、其れ自身に於いて妥當なものであり、そうしてそれが宗教的臆想や藝術的直観によつて、概念的思惟によつて——勿論茲に云ふ思惟とは



無内容な思惟ではない、無内容な思惟は空虚である。内容は經驗から得られなければならない。

それ故に自然科学に於いては kontrollierte Erfahrung としての實驗が、社會科學に於いては資料の蒐集整理が、重要な意義を持つ——認識し得られるものであるならば、科學的研究者は習慣、輿論、個人的利益、其の他總べての atheoretisch な立場に基く成心から自由になり、近頃の認識論者の謂ふ所の思惟必然性又は判斷必然性を内容的標準として眞理を追求して行かねばならないことは當然であらう。近世科學發展の歴史が宗教的ドグマに對する反抗の歴史であつたのもこれが爲めであらう。カントが「知見と學問とが盡きて仕舞ふと、そこで始めて常識を擔ぎ出して來ると云ふことは、近時の狡猾な發明の一つである、斯くすることによつて淺薄極まる饒舌家が極めて深い思想家と大膽に力爭し對抗することが出来る。然し乍ら少しでも知見の残つてゐる間は恐らく人々は此の救助策をとることを避けるであらう。そうしてよく觀察してみると、此の常識に訴へるといふことは公衆の判斷に、即ち哲學者をして赤面させ、俗な小才子をして凱歌を擧げさせ驕慢ならしめる所の拍手喝采に、依頼することに他ならぬ。」<sup>3)</sup>と云つて學問上の論争に於いて常識又は公衆を支柱とすることを激しく排斥してゐるのも、或はまたマルクスが「學問を、假令それには如何に誤謬があらうとも、學問自身からのでなくて、外から、それに無關係の、在外的の關心から探つて來た立場に適應せしめんとする人間を、私は「俗物」と呼ぶ。」<sup>4)</sup>と云つてゐるのも學問的研究者の立場としては當然のことである。學問に「無關係の、在外的な關心」からでなく「學問自身」からの、即ち學問に内在的の立場とは何であらう、論理的當爲の意識に遵つ

3) Kant, Prolegomena. Hrsg. von Vorländer. S. 6 (桑木天野兩氏共譯・岩波文庫本 15頁)

4) Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. II Teil 1. S. 312 (圈點は字間のあけてある所)

て、即ち學問の良心に遵つて眞理を追求する立場でなくてはならない。

勿論、學問は全文化生活の一部を占めるのみであるばかりでなく、學問すると云ふことは吾々個人の生活の全部ではなくて一部に過ぎないであらう。社會に於いて現實に生活してゐる所の具體的な人間としての吾々は、單に思惟する所の觀想的な人間ではなく、お互の生活に干涉しお互に愛憎し互助し鬭争し合つてゐる所の實踐的活動的な人間である。具體的な個人は、此の意味に於いて、理論と實踐との統一であると云つてよいであらう。従つて偉大なる學者であると同時に優れた實踐家である人もあるであらう。或はまた何等かの道德的政策的の、即ち實踐的の、關心から自己の偽と信する所のものを意識して眞として發表するやうなことも起り得るであらう。然し學問的研究者は、苟くも彼が學問的研究者たる資格に於いて在る限りに於いては、實踐的要求に對して學問を適應せしめてはならない。學問研究には勇氣がある。眞理に對する熱烈なる愛が必要である。 *Fiat veritas, pereat vita*。それは學問的研究に従事する者の覺悟でなくてはならないであらう。

フリードリッヒ・シュレーゲルは『哲學の爲めに哲學するのでなく、哲學を手段として使用する者は、ソフィストである』と云つてゐるが、學問的研究者は外からの關心の爲めに『眞理』の發明又は製造を行つてはならないと云ふ意味に於いて、*Philosophie* を本來の『愛智』の意味に解して『學問の爲めに學問するのでなく、學問を手段として使用する者は、ソフィストである』と云つてもよくはないかと思ふ。何故なれば眞理よりも却つて誤謬の方が實踐的要求に適合すると云ふや

うなことは起り得るであらうから、若し學問を手段としてのみ使用するならば學問の名に於いて虚構を企てることを是認することになるからである。

尙、豫め特に此處で注意して置きたいと思ふことは、學問を實踐的要求に適應せしめてはならないと云ふことは、實踐的關心によつて認識關心の方向が決定されると云ふこと、換言すれば、直接與へられたる材料が、そこから觀察され概念的に加工される所の見地を實踐的關心が規定すると云ふこと、を否定するものではないと云ふことである。後ちに述べる所によつて明かであるやうに、私は此のことを否定しないばかりか、却つて其の重要さを承認するものである。學問を實踐的要求に適應せしめると云ふこと、實踐的關心によつて認識關心の方向が決定されると云ふことは同一ではない。

## 二

過去及び現在の經濟學を顧る時吾々は、其れが實踐的政策的要求によつて甚だ濃く色づけられてゐることを知る。今日の經濟學に於ける混亂狀態の主要なる原因は「利害を超越した科學的考察」因はれざる科學的考察の没落、實踐的意圖への科學の適應に在ると思ふ。「全經濟學理論は、其の究極の、最も基礎的内容に至る迄、純粹に Gesinnung に應じて分裂してゐる、嚴密に云へばそれぞれの理論家、大ざつばに云へばそれぞれの學派に従つて分裂し、其の間には全く越えることの出来ない間隙が存在する。今日人々は經濟學理論家に對して次のやうな言葉を以つて呼びかけることが出来る、即ち 君は「價值」とか「資本」とか、「生産力」「地代」「利子」等に就いて

何う考へてゐるか言つて見給へ、そうすれば、君が如何なる人であり經濟を以つて何うしやうと欲してゐるか、をあて、見る。」とゴットルは云つてゐるが、大した誇張でもあるまい。

斯様なことを云へば自然科學の研究者にとつては甚だ不思議に感ぜられるであらう。勿論自然科學に於いても學説は色々に分裂してゐるが、それが *Gesinnung* に應じて分裂してゐるなど、眞面目に主張するならば恐らく人々は嗤ふであらう。尤も十七世紀頃にはまだ自然科學の任務を神への道 (*Weg zu Gott*) の發見に在ると考へ「私は此處で諸君に風の解剖に於いて神の攝理の證示をする」と云ふやうなことを云つた學者もあるが、恐らく今日では斯様な意圖を以つて自然科學的研究に従事してゐる人はないであらう。ところが經濟學に於いてはそうでないのである。此處では、其の取扱ふ所の材料が、研究者自身が一員としてその中に於いて活動してゐる所の、従つて彼にとつて最も利害關係の深い所の、社會生活の諸事實である。それ故に政策的要求によつて思惟が囚はれ理論が之れに適應され易い。

斯様な傾向を一層助長する所の事情は、恐らくは、經濟學に於いて主要なる役目を務めてゐる所の術語が、日常生活に於いて最も頻繁に使用されてゐる所の言葉である、と云ふことであらう。

吾々が科學的研究を始める前に、吾々は既に、無限に複雑な感性世界を、語義 (*Wortbedeutung*) の網によつて包絡され簡單化させられた形態に於いて見出す。人間は日々の生活に於いて思惟によつて無限に複雑な感性世界を精神的に克服する必要に迫られるが、斯様な前科學的な思惟

6) Gottl, Die Wirtschaftliche Dimension. S. 4

7) Max Weber, Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre. S. 539

(vorwissenschaftliches Denken) は、言葉——勿論それは單なる文字または音響としての言葉ではなく吾々が理解するところの意味を持つた言葉——に於いて感性世界の多様性を克服する手段を所有する。大抵の事物は、日常生活に於いては、それ等に共通なる點に於いて重要となる。それ故に、嚴密に云へば、全然同等なる二物は全く存在せず、各客體はそれぞれ個性を持つてゐる譯であるけれども、吾々は、吾々にとつて重要でない所の個性を捨象し、吾々にとつて重要である所の共通的な點のみに着眼して諸客體を一般的類概念の下に包括し、其れ等に一般的な名稱を與へる。斯くの如くにして吾々は無限に複雑な世界を精神的に克服し整理することが出來、其の中に於いて行爲の方向を決めて行くことが出來る。勿論、日常生活に於いて、一つの客體は他の諸客體と共通的な徴表のみに於いて重要となるとは限らない。正に他の諸客體と異つた特徴即ち個性を有するが故に、一つの客體が特に吾々にとつて重要であることもある。それ故に吾々は、ある客體を、それが一方では他の諸客體と共に一つの類概念の見本として見られてゐるやうな場合に於いても、他方では他の諸客體と區別し特に固有名詞を以つて呼ぶ。然しこの個別化的見方の場合に於いても、簡單化の行はれる點では一般化的見方の場合と變りはない。何故なれば、一つの客體は他の諸客體と嚴密に云へば無限に多くの點に於いて異つてゐるであらうが、吾々にとつて重要なのは其の中の一部分だけであり、そうして斯様な重要な特異的な諸規定の複合として始めてある客體は、吾々によつて眞に個性的なるものとして他の諸客體から區別されるのであるからである。

斯様に吾々を取り卷く所の感性的世界は既に日常生活に於いて言葉を媒介として精神的に克服され簡單化されてゐる。そうして科學は、少く共其の出發點に於いて、此の前科學的思惟、前科學的概念構成に結びつかざるを得ないであらう。特に經濟學の如き吾々の日常社會生活の諸事實を材料とする科學に於いてそうである。吾々は總べて相互に一定の關係に入り込んで生活してゐる。吾々の生活は常に『吾れ』と『汝等』との生活即ち眞實の意味に於ける『吾々』の生活である。純粹に孤立されたる『吾れ』の生活なるものは存在しない。アダムとイブとの時代に於いてさへ既に『吾れ』と『汝』との生活があつた。イブの造られない前にはエホバとアダムとの間に於ける『吾れ』と『汝』との生活があつた。斯様に吾々の生活は眞實の意味に於ける『吾々』の生活であり、吾々は此の *Lebensstrom* の怒濤の中に於いて吾々の行爲の方向を決めて行く爲めにそれについて思惟する必要に迫られる。それ故に人間の最も本來的なる智識は『吾々』の生活についての智識である。原始人が自然を人格化して考へるのは『吾々』の生活についての智識を自然界に迄適用したに過ぎぬ。斯くの如く『吾々』の生活即ち社會生活に就いては、それに就いての科學的思惟以前に、既に總べての人々の共有物としての智識が存在し、そうしてそれは日常社會生活のロゴスの中に謂はゞ沈澱させられてゐるのである。經濟學は斯様な日常社會生活についての日常の智識を其の出發點に於いて受け取る。此の意味に於いて吾々は經濟學を *ゴットル* と共に *Erkenntnis des Bekannten* と呼んでもよからう。だから、經濟學に於いて主要な役目を務めてゐる所の『價值』『價格』『資本』『利子』等々の言葉は、みな日常生活に於いて最も頻繁に使用されてゐる所の言葉であ

る。

然し日常生活の言葉は其の意味の極めて不明確なのを特徴とする。日常生活に於いては語義内容の不明確なところ却つて必要である。言葉が嚴密に一義的でなければならぬならば、日常生活に於ける人間相互の思想の傳達は圓滑安易に行はれることが不可能となるであらう。それ故に多義的な言葉程日常生活に於いては好んで使用せられる傾向がある。然し科學の立場はまた別である。それは出發點に於いて日常の思惟日常の概念構成に結び付くが——何故なればそうである。それは研究に着手することが出来ないであらうから——斯様な前科學的思惟前科學的概念構成の中に止つてゐることは出来ない。其處に止つてゐなければならぬならば科學は成立しない。そこで、少くとも重大なる誤解の伴ひ易い場合には日常の用語に明確なる概念内容を與へることが必要となる。然し概念は認識の手段である、従つて如何に概念を決定するかは認識課題によつて決定されなければならない。學者が語感の許す範圍内に於いて自己の趣味好尚に應じて勝手に概念を決定してよいと云ふ譯ではない。單なる定義は問題を解決することは出来ない。認識課題に關係せしめて構成されて始めて概念は眞實なる科學的概念となる。認識課題に適合しないやうな概念は科學的には無價値な概念である。即ち理論的經濟學に就いて云へば、それは、今日の經濟的社會生活を其の歴史的特殊性に於いて系統的に説明することを課題とするが故に、斯様な課題に關係せしめて概念内容は決定されなければならない。勿論私は、凡ゆる時代の經濟的社會生活に共通な形式、苟くも經濟的社會生活が經濟的社會生活として存在する限りは、それによつて構

成されてゐなければならぬ所の形式、の研究即ち Grundlehre der Wirtschaft とも稱す可きもの、成立は可能であり、それは今日の經濟生活を其の歴史的特殊性に於いて説明する上に於いても極めて重要であると考へてゐる。然し今日一般に理論的經濟學或は經濟原論として存在してゐる所のものが、今日の所謂資本主義の經濟生活を其の歴史的特殊性に於いて系統的に説明することを主要課題としてゐると云ふことは、恐らく多數の經濟學者のこれを承認する所であらうと思ふ。理論的經濟學の課題にして上述の如きものであるならば、それに於ける諸概念は此の課題に關係せしめて決定され、前者は後者に對して統一的連繫の下に立たなければならぬのであるが、實際の状態は不幸なことにはそうでないのである。諸概念は理論的經濟學の課題に關係せしめて決定されず、寧ろ言葉それ自身が問題を代表するかの様に研究の始めに於いて先づそれが問題とされ、定義の爲めの定義が行はれる。斯くの如くにして謂はゞ *schindlos* な日常の言葉の中に *transverbale Intuition* を通じて政策的要求が忍び込み、それに應じて理論が構成される。「價値とは何ぞや」「資本とは何ぞや」と云ふが如き問題が果てしなき言葉の論争に墮して仕舞つたのもこれが爲めであらう。ゴットルは *Der Wertgedanke, Die Herrschaft des Wortes* 等の論文に於いて今日の經濟學が言葉から出發し、肝心の根本問題が忘れられて仕舞つてゐることを痛撃してゐるが、全く同感である。

私が茲に經濟學が政策的要求によつて色づけられてゐるとか或はそれに適應されてゐると云ふのは、經濟學の名に於いて、如何にすべきかと如何にある可きかと云ふ立場から價值判斷が行

8) 何れも Gottl, *Wirtschaft als Leben*, 1925. 中に採録されてある。



はれてゐる場合のみを云ふのではない。斯様な價值判斷は、後にも述べるであらうやうに、他の科學に於けると同じく經濟學の權限外に屬する。科學は豫言者の役目を務め得る程萬能ではないのである。私が此處に云はんとするところは、價值判斷から離れ、稍々不正確な言葉で云へば『事實の説明』に止つてゐるが如き外觀を呈してゐる所の經濟學理論に於いてすら、既にそれが政策的要求に適應されてゐると云ふ點である。

例へば一部の經濟學者によつて劃期的の著作と呼ばれてゐる所のクラークの『富の分配』の序文は次の如き句を以つて始つてゐる。——『社會の所得の分配は自然法則によつて支配されると云ふこと、そして此の法則は、若しそれが磨擦なしに作用するならば、生産の各要因に對して、其の要因が創造する所の富の分量を與へるであらうと云ふこと、を示すのが本書の目的である。』即ちこれがクラークの『富の分配』全體を支配してゐる所の *Thema probandum* である。そして同書第一章に於いて云ふ、『……自然法則が支配してゐる所に於いては、何れの生産的機能に歸屬する所得の分け前もその眞實の生産物を尺度として決められる。換言すれば、自由競争は勞働者には勞働が創造する所のものを、資本家には資本が創造する所のものを、企業家には整列的機能が創造する所のものを與へる傾向がある。分配の全研究は、此の觀點から見る時は、特殊生産の研究である。それは富を創造する作業の分析、及び共同して富を作り出す所の三要因の各々に、それが別々に合成果に寄與する所の部分を歸屬せしめることである。各要因に生産上の特別な持分を、そして各々にそれに相應する報酬を——此れが分配の自然法則である。此の命題

を吾々は證明しなくてはならない(！)、そうしてそれが眞實であるか何うかと云ふことは到底結論では云ひ得られない程重大なことである。社會が今日の狀態に於いて存在し得る權利、及びそれが現狀通りに存続するであらうと云ふ蓋然性に關する問題である。此れ等の事實は此の分配の問題に非常な重要さを與へる。』また云ふ『若し實際の勞賃が勞働の全生産物であり、若し利子が資本の生産物であり、また若し利潤が整列的行爲の生産物であるならば、私有財産は其の發生點に於いて保證されてゐる。』リーフマンは此れ等のクラークの言葉を評して『吾々は全然異つた二物に就いて語つて居り、クラークは火星に於ける經濟制度でも問題にしてゐるのではないかと思はれる。』『……クラークの命題は、若しも彼が後ちに實際にそれに憑據するならば、經濟學理論の本來の課題と全然無關係であらう。斯様な理論に對してこそ「資本主義」經濟學に對する社會主義の攻撃を充分理解することが出来る。』と云つてゐるが、恐らく多數の人々はそう云ふ感じを受けるであらうと思ふ。尤もクラーク自身は彼の命題の眞偽は純粹に「事實」の問題であつて倫理道德の問題ではないと云つてゐる。然し、所謂『自然法則』又は『自由競争』なるものはクラークに於いては、古典學派の人々に於けると同様に、決して單なる事實の問題ではなく同時に理想である。『それは彼が如何に獨占に對して激しく反對してゐるかを見ても分る。』私は今彼の理論の内容に立ち至つて悉しく吟味する余裕を持たないが、彼の著書の讀者は、彼の所謂命題を證明する爲めに其處に如何に大膽なる理論的 Konstruktion が行はれてゐるかを發見せられるであらう。

私は政策的要求、廣く云へば實踐的意志により思惟が因はれ誤謬に陥り易いばかりでなく、全

9) Clark, Distribution of Wealth. pp. 3, 9.

10) Liefmann, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. II. Bd. 2 Aufl. S. 608-9.

11) Cf. Homan, Contemporary Economic Thought, 1928. pp. 39-, 94, 100.

然囚はれないと云ふことは極めて困難であると云ふことを知つてゐる。然し乍ら斯くの如き單なる事實は科學的研究者としての吾々の義務を解除するものではない。有史以來惡が絶えたことが無く今後もまた絶えないであらうと云ふ單なる事實は、社會人としての吾々の道德的義務を解除するものでないのと同様である。惡が絶えないと云ふことは恐らく多數の人々にとつては却つて善を求めるとなるであらうと同様に、政策的要求によつて思惟が囚はれ誤謬に陥ると云ふことを却つて科學を政策的要求に適應せしめないやうにするのが科學的研究者の義務であると云ふことを證明するものに外ならぬ。前にも述べたやうに、歴史的文化財としての科學は歴史的社會的連繫に入り込んでゐるところの人間の生産物であり、歴史家にとつては科學の領域のみを孤立せしめて、なくそれを歴史的社會的全體との關係に於いて取扱はなければならぬであらう。そうして此の際歴史家は科學的理論の成立發展に當つて實踐的意志が如何に重要な役目を務めてゐるかを發見するであらう。然し乍ら、其の故に科學は何等の永久的内容をも持つことの出來ないものであり、結局其の内容は實踐的要求に適應するやうに作り出された *Fiktion* に過ぎないものである、と結論するならば、斯様な相對的主觀的なるものゝみを認めて絕對的客觀的なるものを拒否する所の立場は、現在を過去の發展の終結としてのみ理解し現在を將來への發展の過程として理解することを知らない所の立場と並んで、*schlechter Historismus* に屬するものであらう。何故なれば斯様な立場は當然懷疑論に導き科學それ自身を廢棄する所のものであつて、苟くも科學的研究者たるものゝ探ることの出來ない立場であるからである。カウツキイも云つてゐるやう

に「各人は、彼にとつて不愉快な主張に對しては、彼の目的に適合してゐる所の主張に對してよりも、より批判的である。だが、斯様な傾向の中に思惟の一つの *Fehlerquelle* ——それはまことに一部の無批判的傾向の人々に於いては甚だ強く且つ妨害的なものとなることがあるが——よりも以上のものを認めんとするならば勿論非理である。』『一部の理論家の單なる傾向からして凡ゆる理論に即斷を下し、それが「何時も意志の方向に適應してゐる」と宣言する」ことは出来な<sup>13)</sup>い。

私は先きに歴史家にとつては科學の領域のみを孤立せしめて、なくそれを歴史的社會的全體との關係に於いて取扱はなければならぬであらう。そうして此の際歴史家は科學的理論の成立發展に當つて實踐的意志が如何に重要な役目を務めてゐるかを發見するであらう、と云つた。此の場合に於ける實踐的意志の役目について吾々は根本的に異なる所の二つを區別することが必要である。一つは科學を誤謬に陥らしめる所の、換言すれば科學をして、自己の具體的な要求に適應せしめんとする所の實踐的意志の役目であり、他は認識關心の方向を、換言すればそこから材料が觀察され概念的に加工される所の觀點或は視角を決定するに當つての實踐的意志の役目である。私が科學的研究者は科學を實踐的政策的要求に適應せしめてはならないとか或は政策的要求によつて思惟が囚はれないやうにしなければならぬと云ふことは科學的研究に於いて實踐的意志の第一の意味に於ける役目を排斥したゞけであつて第二の意味に於ける役目を排斥したのではない。

凡そ科學には、そこから與へられたる材料が觀察され概念的に加工される所の觀點又は立場が必要である。何等の觀點何等の立場も持たない所の無前提の科學なるものは存在しない。此の意に於いては總べての科學は皆一面的である。何故なれば全く無前提では混沌たる生起を茫然と眺めてゐるより外仕方がないであらうから。尤もこれも一つの立場だと云へば云へるが、科學の立場であり得ないことは明かである。苟も科學が成立する爲めには、與へられたる材料の中から本質的なものと非本質的なものとを分ち概念的に加工する爲めの立場が必要である。それならば認識主體をして斯様な一つの立場を探る様にしむけるものは何であるか。少く共社會科學に關する限りに於いては、それは實踐的關心であらう。吾々は總べて一定の社會的連繫に入り込んで生活してゐる。斯様な社會人としての吾々は決して單なる觀想的な人間ではなく實踐的な人間である。そうして吾々は此の社會生活に於いて社會の一員として他の人々と共に解決する必要にせまられる所の、換言すれば單なる個人の私事ではなく、一般的の重要さを持つ所の社會の公事としての種々なる問題に遭遇するであらう。吾々の認識關心の方向が、斯様な問題に對して吾々が持つ所の實踐的關心によつて決定され、單に現在の社會生活計りでなく過去の社會生活をも、此の認識關心の方向から觀察し概念的に加工するに至るは當然のことであらうと思ふ。然し乍ら此のことは如何なる觀點、如何なる立場から材料を觀察し加工するか（此の場合に一般化的概念構成を行ふか個別化的概念構成を行ふかの問題が起るが此處では觸れずに置く）の問題、ソツケルトの言葉で云へば價值關係の問題であつて、實踐的要求に科學を適應せしめること、同一では

ない。今極めて難解な比喩であるが社會生活を赤、白、青の三色の複雑なる模様よりなる敷物に喩へれば、經濟學は赤のみに着眼して之を觀察し、政治學は白のみに着眼して之を觀察し、社會學は青のみに着眼して之を觀察すると云ふが如きものである。自己の實踐的要求に應じて頭の中で勝手な模様を作り出してよいと云ふ譯ではない。認識主體にとつて其の模様が氣に入つても入らなくても、彼は、苟くも彼が赤に着眼して敷物を觀察する限りは、其の立場から問題となるものは總べてこれを顧慮しなくてはならない。

よく知られてゐるやうに經濟學は『陰鬱なる學問』と名づけられたが、經濟學の如き性質の學問は、カアライルの云つたのとは稍々違つた意味で、陰鬱なることから遁れることは出来ないであらう。然し此のことは決して經濟學それ自身の罪ではない。若し罪と云ふやうなものがありとすれば、經濟學の取扱ふ材料の罪である。マックス・エーバーの云つてゐるやうに『不愉快な事實及び人生の現實を其の冷酷さに於いて見やうと欲しない場合程學問の關心が持続的に、より悪しく廢棄される場合はない。』科學的研究者にとつては明るい方面も暗い方面も材料として同等の價値を持つてゐる。暗きが故にどの理由でこれを省いて仕舞ふ譯にはいかない。

尙、前にも述べたやうに科學を實踐的政策的要求に適應せしめてならないと云ふことは、科學的研究者は象牙の塔に閉ち籠つてゐなければならぬと云ふことではない。科學者を象牙の塔へ閉ち込めて置くか何うかは、其れ自身一つの政策上の問題であつて、科學の名に於いてこれを決定することは出来ない。同一人にして政治上の熱烈な闘士であると同時に冷靜な科學的研究者で

あることは勿論可能である。例へば近時ではマックス・エーバーなどは此の型の人と見ても差支へないかと思ふ。實踐的政策的要求に囚はれてならないと云ふことは科學的研究者の全人格に關する事柄ではなく、たゞ科學的研究の仕方に關する事柄である。

更に、これ亦自明なことであるが、政策的要求から自由な科學と云ふことは、科學的研究に於いて全く熱情を取り去らなくてはならないと云ふことを意味するものではない。科學の進歩には却つて熱情が必要である。盲目的信奉の代りに假借なき批判——それは他人の學說に對する批判のみではない、それにも増して激しい自己批判——がなくては科學の進歩は望まれないが、斯様な批判は眞理への熱愛がなくては行はれないであらう。偉大なる學者の著作の多くが完結されたる體系に於いては、未完成的形態に於いて殘されてあるのも、誠に理由のあることである。